

---

# 森の奥の洋館にて

杉代敦季

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

森の奥の洋館にて

### 【Zコード】

N5287Z

### 【作者名】

杉代敦季

### 【あらすじ】

森の奥にある洋館に住む青年と、連れてこられた少女の物語。  
しかし、彼はヴァンパイアで、少女は人間で。

## 彼とわたし

人里から離れた大きな森の奥深くに、その城はあった。迷い人のみが行きつくというその城は半ば伝説と化しており、しかし人々から忘れ去られようとする頃にまた存在感を表すのだった。

これはその城の主と、そこにいる少女のお話。

少女は大きな窓から見える手入れの行き届いた庭を見下ろし、ため息をひとつ零した。時刻は夕暮れ、あと半刻もすれば暗闇は訪れるだろう。そうすればあの人もこの部屋へとやつてくる。想像しただけでも身震いがした。

少女は振り返り、上等な家具が置かれている自身の部屋をながめた。自身の部屋などというが何てことはない、この城へ連れてこられたときにあてがわれた部屋だった。だから、愛着も何もない。少女がここへ来てから4日が過ぎようとしている。陽が落ちてから現れる城主の話だと、すでに1週間になるらしいが。

少女の記憶は途切れていった。炎に包まれた村にやつてきた彼。次に少女の目に入つたのは、自分が今いるこの部屋だった。

どうやら自分はここに連れてこられたらしいのだ。生まれ育つた村は山火事が飛び火したせいで炎に呑まれ、もう無いのだという。城主に初めて会つたその日にそういう話を聞いて、少女は彼に詰め寄つた。そんなのは嘘だ、わたしを早く村に返して、と。だが彼は目を伏せ、静かに首を横に振つただけだった。そしてその後。

思い出して、少女は身体を震わせた。

その後、少女は大きなベッドに乱暴に押し倒され、彼に血を吸われた。首筋に残つたその痕は消えかかってはいるが、記憶には鮮明

に刻まれている。そう、城主はヴァンパイアだった。

ここから逃げたい。何度もそう思つたことだろうか。城の上位にあると思われるこの部屋の窓から飛び降りるには危険だし、唯一のドアには外部から鍵がかけられていて自由に出入りはできなくなつている。今もドアノブに手をかけても、びくともしない。このドアが開くときは城主が来る時と、少女付きの使用人だという人間が入る時だけだった。使用人の人間とはどういうことかとその人に訊いたら、この城には城主である彼と、ヴァンパイアと人間との子であるダムピール、それから森に迷つてここに行きついた人間が暮らしているのだという。何故逃げないのか、そう問つたら「ここから出ない」と答えた。それが城にいる条件なのです」と言つ。確かに大きな森をまた迷い命を落とすよりも、ここにいて長らえるほうが懸命かもしない。

だが少女はここから逃げたかった。

突然、手をかけたドアノブから振動が伝わり、続いて鍵が外される音が響いた。少女はあわててドアから距離を取つて身構える。この時間に部屋へとやつてくるのはあの人しかいない。

「ヴァンパイア

」

姿を見せた城主に向かつて忌々しげに吐き出されたその言葉に、彼は端正な眉をよせた。

「名前で呼べと言つたはずだが」

物音のしないこの空間では低い声がやたらに響いて、少女はまだビクリと震えた。彼は少女をちらりと見やり、部屋を横切つて窓の近くに置いてあるソファに座つた。

ヴァンパイアの象徴とも呼べるであろうマントをしていない彼は、ごく普通の好青年に見えた。いや、ごく普通というのはおかしいか。長身で美形とくれば普通ではないだろう。薄いガラスの眼鏡をかけた彼は無愛想で、常に機嫌が悪いようだった。

だつたら、わたしなんか連れてこなければ良かつたのに。

だが彼は、少女を返すつもりは無いのだと言つ。ソファに座つている彼は少女に視線を向けた。

「アンネリース、こつちへ来い」

低い声が少女の身体にずしんと重く響いた。昨日、一昨日と同じことを言われた。だが少女には初日の、あの記憶が残つてゐる。しかし無理矢理血液を吸われた初日とは違い、その後は少女のことを呼んでも無理にはしなかつた。今日と同じように「こつちへ来い」と言い、恐怖心から近付かない少女に困つたような表情を見せ、そつと彼女を抱きしめてから部屋を出たのだった。

今日も近付くものかと思つたのだが、何故だらう、足が彼のもとへと少しづつ動いていた。いつもと同じように見えたその表情が、鋭さを持つてゐるその瞳が、悲しそうに揺れたからか。

おずおずと差し出された白い手を彼は右手でそつと握り、ゆつくりと引きよせた。続いて彼の左手が細い腰に回り、膝の上にゆつくりと乗せられた。慌てて下りようとしたが、力強い彼の両腕に包まられる。

「アンネリース

」

何事なのか。零れ出了自分の名は切なさを帶びていて、少女の胸を貫いた。この人は一体どうしたのだろう。考えるよりも早く、彼の唇が少女の首筋をすべり、彼女は全身を震わせた。

怖い。

それだけが思考を支配し、彼の腕から逃げ出すことなど不可能だつた。

「大丈夫だ」

こぼされた吐息は首筋を撫で、少女の恐怖心をさらにも煽る。彼の歯が刺さつた。

「いつ　！」

だが痛みは一瞬で、その後は首筋をなぞる舌の感触が続いた。

あの日と違う。あの日は無理矢理で、血も相当吸われたように感じた。なのに今日は出てきた血液を舐めるだけ。どうしたのだろう。再び痛みが少女を襲った。

「キーツ……キー、ツ　　」

自分もどうかしている。恐怖に陥れるこの人の名を呼ぶなんて。震える白い手はいつの間にか彼の服を握っていた。

満足したのか彼は唇を離し、少女をそっと抱きしめた。背を撫でるその手が暖かいことを、髪を梳くその手が優しいことを、少女は知っていた。

昨日も一昨日も抱きしめられたじゃないか。

抵抗こそすれ、それは怖かったから。得体の知れない生き物など、恐怖の対象でしかない。そんな少女を、彼は何も言わずにそっと抱きしめた。

瞼が重くなってきた。次に目覚めた時にはもう陽は昇っていて、彼はこの部屋にいないのだろう。訊きたいことがたくさんあるのに。

彼の大きな手は、それを許してくれそうにはなかった。

「おやすみ、アンネリース。良い夢を

その言葉は、少女には届かなかつた。

彼とわたし（後書き）

続きます……！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5287z/>

---

森の奥の洋館にて

2011年12月17日22時48分発行